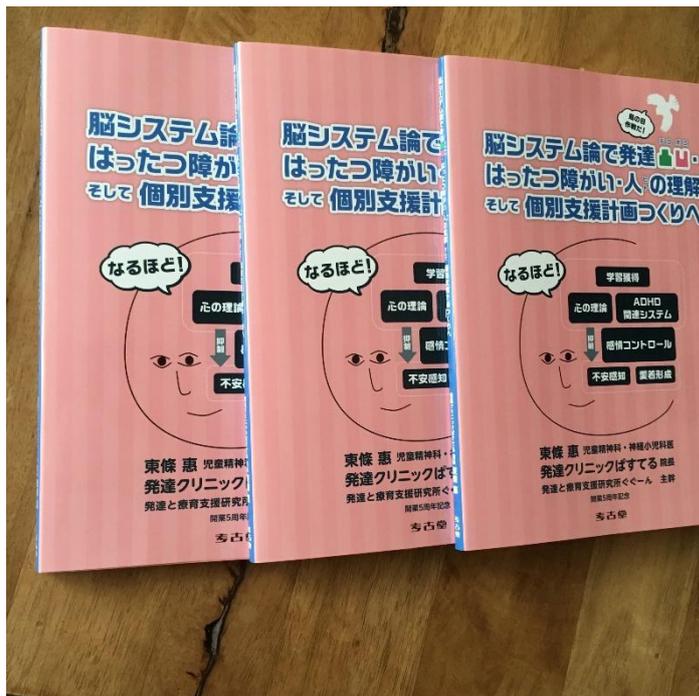


東條恵の**新刊**のお知らせです。

タイトル「**脳システム論による発達凸凹・はったつ障がい・ひとの理解
と個別支援計画づくり**」（考古堂書店 2020年6月17日発刊）



内容の大筋

- ・発達凸凹のお子さん（自閉スペクトラム症や ADHD など）の教育現場、集団保育現場では、個別支援計画という言葉で支援を考え、紙に表し確認する時代です。どう考えるかで、新たな考え方を提案し、支援内容の更なるレベルアップを狙う事が本書の目的です。
- ・「鳥の目作戦」と称して、人間関係や脳を含む「全体を俯瞰する視点」を導入する試みで、脳に関しては特に「脳システム論」と呼称しました。
- ・脳の動きを大雑把に推測し、問題点を分析し、それに基づき支援のストーリーを考えることとなります。おおざっぱな推測をする主な視点は以下の 6 点です。人間的脳（①②⑥）、本能的脳（④⑤）、その中間（③）です。
- ・具体的には、①心の理論システム、②ADHD 関連システム（抗 ADHD 機能システム）、③感情コントロールシステム、④不安感知システム、⑤愛着システム、⑥学習システムです。
- ・人間的脳は本能的脳を抑制して生きていますが、感情コントロールができなくなる程に、本能的脳で不安が強まると、人間的脳を取り払ってしまい、感情に走るという常識的ストーリーなどを考え、そこから支援を考えるようにします。

- ・支援対象が成人であっても、知的障がいがある場合でも、同様の考え方を導入できると思います。精神疾患の理解にも役立つはずです。
- ・これらの脳の動きの総論的内容と、事例検討、そして支援内容、また不登校支援が、主な内容です。

販売に関して

- ① 現在、発達クリニックぱすてるで、著者割引価格にて販売しております。複数冊を郵送でご希望の方は、FAX 025-288-7201にてご連絡ください。複数冊の場合のみ郵送します（送料はご負担して頂きます）。支払い方法は同封します。
- ② ネット上や書店での購入は、2020年6月17日以降と思います（発刊が6月17日です）。

内容の追加

医療の場と、それ以外の保育や教育の場では、目の前のお子さんの見方で、ずれがあると思われま。医療では、医療モデルで考え、診断し治療をするという発想です。保育・教育の場では診断名というよりも、ご本人や大人側の困り感を見定め支援を考えるという流れでしょう。この両者の橋渡しをすることが、脳システム論の役目です。これらの利用は、当事者（困っている本人と父母や支援者の双方）への利益になりましょう。脳システム論を通して、一つの支援のストーリーを考えての支援が可能になり、父母や支援者の共通認識が作れるからです。

脳システム論は、医療モデルだけでなく、愛着モデル、ストレスモデル、人間関係モデルなどを融合した見方です。脳システム論を通して、総合的・俯瞰的に当事者の問題点を捉えた支援が可能になるでしょう。

最後に

皆様からの建設的なご批判やご感想を頂ければありがたいです。記載の間違ひがありましたら、訂正させていただきます。ご指摘ください。

本書を読まれた方が誤解しやすい点があるとすれば、以下の二点と推測します。あらかじめ、述べておきます。

- ① 本書は、実際の脳の動きを正確に述べたものではないことを、まずは知っておいて読んで下さい。私には、そこまでの力はありません。「療育支援をする上で、このように考えを組み立てると、問題点の把握と支援の組立がしやすく明確になる」ことを目的にした論理展開である点をご理解ください。
- ② 自閉スペクトラム症に関しては、「心の理論の不調」を中心問題としています。この言葉は、現代の自閉スペクトラム症の定義中に直接出てくる言葉・論点ではないこともあり、違和感を感じる方、初めての言葉で戸惑いを感じる方もいらっしゃるのではとは推測します。そして心の理論を最大の問題として自閉症理解を展開している解説書は多く

はないと認識しています。著者にとって、自閉症理解の本質問題として最重要と認識しているのが、「心の理論の不調」の問題です。この論点を問題にして支援を考えています（年齢が低ければ、直感的共感力のレベルアップを目指しての愛着の強化、そしてもう一つの共感の方法としての認知的共感力のアップに関しては、人はどう考え感じているかの学習を通してのレベルアップを考え、これらを通しての社会性と適応力のアップを考えています・こちらは言葉が絡むので、年齢が高い人の問題となります）。このような理解・ストーリーに慣れておられない方にとっては、違和感を感じるかもと推測できます。しかしながら、心の理論不調への支援は、社会適応力をアップするための療育支援の実践上の問題として、必要かつ重要な最大の課題でしょう。

以上ですが、「脳システム論」の普及が進むことは、著者として嬉しい限りですし、お子さま方とご家族の利益、支援者の利益になることを確信しています。宜しく願い申し上げます。

東條恵 2020年6月7日

本書と昨年末に出したものの。最近の二部作となります。

